

小説同人誌評 25

長篇の魅力

細見和之

今回、大阪文学学校の事務局から私のもとに届けられた同人雑誌の数は、これまででいちばん多かった。『樹林』本誌が春期号と秋期号の二冊になったことも影響しているかもしれない。ウェブ上での年四回のスケジュールは以前と同じでも、時間の融通が利く分、区切りが難しいのかもしれない。いわば、雑誌が溜まっていた状態である。月刊で発行されている『VIKING』など、今回は半年分計六冊がふくまれていた。

そういう事情で、今回はこの同人誌評のために読んだ作品数もこれまででいちばん多かったはずだが、そのなかで、今回は長篇に魅力的な作品が多かった。「長篇」といっても同人誌なので、四〇〇字詰換算三〇〇枚、四〇〇枚といった作品には、連載でもなければ行き当たらない。そして、こういう同人誌評で連載にまできちんと目を届かせるのは、私の能力を超えている。したがって、通常の短篇、

中篇、長篇という区分とはずれることになるが、三〇枚前後で短篇、五〇枚前後で中篇、一〇〇枚を超えると長篇という印象になる。そういう私なりの区分で「長篇」に相当するものに印象的な作品が多かったのだ。

その筆頭は「moon」第15号掲載の、キンミカ「チキンファット」。一六〇枚超の「長篇」である。

冒頭、「自殺未遂」をしつららしい高校生の貴和子（実際にはマリファナなどの過剰摂取だったようだ）が夜、救急車で運ばれてゆくのを、同級生の香帆が見送るところから物語は始まる。二人とも家出をして、高校の社会科学の教員・佐越のもとに居候している、という設定。前半は、香帆とはかなり異なる貴和子の姿が、その複雑な家庭環境とともに、香帆の視点で捉えられている。後半、貴和子と香帆が、貴和子のボーイフレンドの「てつちゃん」とともに、「エイコリアン追放！」を叫ぶデモに巻き込まれる。「エイコリアン」とは「エイリアン」と「コリアン」を合わせた、在日コリアンに対するヘイトスピーチのセロウガンの言葉である。貴和子も「てつちゃん」もデモ隊の言葉に合わせて「エイコリアン追放！」と叫ぶ。そこから、香帆が在日コリアンのひとりであるという問題があらためて浮かびあがることになる。香帆は貴和子と、自分も「エイコリアン」だと打ち明ける…。

嫌韓・嫌中といった日本人の態度がきわめて表層的なものであること、ひとりひとりの人間はもつとずつと深いところで繋がったり切れたりしていること、作品はそのことを強く訴えている。

タイトルは、同タイトルのアニメ映画から取られている形になっている。パイオリンの名手となったロマの若者が子どもどきに鶏泥棒だったことを打ち明ける感動的な物語ということだが、ウェブ検索してもそんな映画はヒットしなかった。私の調べ方がまずいのかもしれないが、これも作者の創作だとすれば、たいしたものだ。

「moon」同号掲載の、浅井梨恵子「二月の橋」、松嶋涼「あやめ」の「牛カツ」は、いずれもまとまった好短篇。

『革』第31号（二〇一九年秋号）掲載の、田村初美「雲のアンパン」も、一九六二年、日本の高度成長期のまったなかの被差別部落の情景を、小学校二年生・多恵子の視点でゆつたりと描いていて、印象深い。こちらは一四〇枚超の長篇。

学校が夏休みの八月の朝、父・信夫の自転車の荷に乗せられて、多恵子をはじめ海を訪れて、海水に体を浸してまた戻るといっただけの数時間の物語なのだが、通りすぎる村のいたるところに、忘れたい人物がたらずんでいたりと、大切な記憶が染み付い

ていたりする。それが丹念になぞられてゆく。信夫の妻・織江は一家で唯一の識字者であるのに対して、読み書きがきちんとできない信夫は、失業対策事業の仕事に嫌気がさしてやめようとしている。その事業であたえらえるのは土方仕事主だが、雨で仕事がなくても給料だけはもらえる。そういうありかたに違和感があるのだ。一方、多恵子は小学校で明らかにのけ者にされている。いまふうにいえばじめの対象になっている。そのことを心配して祖母はしきりに多恵子に問いたです……

八方塞がりのような状況のなかで、信夫の背中であたれる「アハハハ」という多恵子の笑い声が、作品をとおして明るくこだまし続けているのが印象深い。

『VIKING』第824号掲載の、宇江敏勝「狼のおぼる夜に」は、戦後間もなくの、和歌山県の「開拓村」を舞台とした、こちらも一四四枚超の長篇。「おぼる」は方言で「ほえる」の意味。

こういう物語のなかに、炭焼きの場面はもとより、山兎を捕る「くくり」という罾の仕事組みと仕掛けたや、川での夜釣りの方法、当時の村の結婚式のしきたりまで、いつもながらじつに克明に記述されている。鳥や獣の声がたえず飛び交っているのも今回の作品の特徴のひとつで、タイトルにもある「狼」の「おぼる」声については、この時期まで野生の狼が開拓村周辺に確かに棲息していたことの証言にもなっている。それは時代の変遷を象徴する「声」でもある。そもそも評者である私は「開拓村」というものが戦後間もなく日本の各地に設置されていたこと自体を知ら

ず、自分の不明を深く恥じたのだった。同じく『VIKING』第825号掲載の、夏川龍一郎「交通巡査日誌」は、勤務して二、三年の若い交通巡査である「僕」の視点で、警察の内部をいささかユーモラスかつ丁寧に描いていて鮮やか。こちらは、九二枚超で、今回の私の区分ではぎりぎり中篇となる。

出だしの、六甲山で発見された変死体（腐乱死体）を六人の警官で担ぎおろす、という場面からして鮮烈。遺体の腐臭が読んでいるこちらに臭い立ってくるようだ。警察の内部事情、警察学校や寮の雰囲気、いずれも作者にしか書けないものに違いないと思える。落としどころをどこに持って来るか、という問題はあるだろう。あるいは、延々、こういいう話が続けるのも面白いかもしれない。

さらに『VIKING』第828号掲載の、梶野吉郎「幻影のパラード」は、老齢にいたった「わたし」が若いころのフランス留学時の体験を振り返るという設定の、一四一枚超の長篇。「わたし」は「スタン」を研究するために、パリではなく、スタンの故郷イグノーブルに留学する。優れたスタンダール研究者である作者の梶野自身、若いころにイグノーブルに留学していた身なので、「スタン」とはスタンダールのことであり、「わたし」の留学体験の核には作者自身の体験があるのだと推測でき

る。

「わたし」は「スタン」研究のためにイグノーブルに赴くのだが、研究はいつこうに進展せず、結局パリに出て、日本の商社でアルバイトをすることになる。日本からやって来た客の観光案内などをするのである。しかし、パリで「わたし」は、学生時代にはのかな思いを寄せていた女性と再会する。大学のそばの自宅に暮らしていた、他大学の女学生である。「わたし」は何度か彼女とパリで出会いを重ねるが、二人の関係は進展しないまま、彼女は日本にもどってゆく…。

彼女はどのようにしてパリにやって来ていたのか。「わたし」を追いかけて、ということがあったのか。あるいはたんなる偶然なのか。肝心なところで隔靴搔痒の印象が残る。作品の冒頭、老齢にいたって彼女が密かに「わたし」に別れの挨拶を送っていたかの設定についても同様。すべては「わたし」の思い込みということなのだろうか。いずれにしろ、作者の青春の総決算という強い意気込みを感じさせる長篇である。

『イルカと錨』第4号掲載の、宇多滋樹「月と煙突」は、ひとり暮らしをする「私」の視点で、行きつけの銭湯での人間模様を描いた、一〇九枚超の長篇。

五十歳を過ぎて大阪の印刷会社をリストラされた「私」は、妻と中学生の子ども二人を

妻の実家に帰して、奈良市街でひとり暮らしをしている。別の印刷会社に校正の仕事で囑託として雇われることになったが、妻のもとへ仕送りをしなければならず、生活はままならない。風呂のついていない学生アパートであることもあって、一日の終わりに近くの銭湯、燕湯で体を休めるのを楽しみにしている。そこで出会う不思議な人物たちの姿がこの物語の勸所である。

風呂でたえずなにごとかをぶつぶつ呟いている「ブツブツおじさん」、ジェット湯と水のシャワーのあいだを繰り返して行き来している「水掛け不動」、身長百九〇センチ、体重九〇キロを超える巨漢の「象アザラシ」、湯船の縁で背中を丸めてうたた寝をしている「カタツムリ」など、「私」は自分のなかで常連客に勝つ手にあだ名をつけている。いずれも、なにかに憑かれたような人物だが、作者はそれをつつにユーモラスに描いている。

タイトルは「燕湯を出ると、煙突の上につかかろうように満月が煌々と照っていた」という一節から取られているのだろう。これに続く、月光のもとでの二匹のイタチの姿(「イタチのダンス」)を描いた箇所はとても美しい。「せる」第11号掲載の、吉川猛「ザ・スリープ」は、主人公が他人の夢のなかに入っていく物語で、一四〇枚超の長篇。

三十歳代前半の田村学は、あるときから身

辺の異変に見舞われるようになる。朝起きると、部屋にあるはずのものが消えていたり、買ったはずのないものがあつたりするのだ。最初は「若年性認知症」と思つて医師の診断をおおいだりするが、やがてウェブサイトで見つけた「睡眠セラピスト」に導かれて、睡眠中に他人の夢のなかに入るようになる。しかも、その「夢」は現実と繋がっているようで、その夢をつうじて相手の現実にも介入できるのである。学は、気に入らない上司の夢に侵入して、その鞆を持ち帰ったりする。そして、そういう夢をつうじて、学が無意識の底に沈めていた、気がかりな記憶を掘り起こすことには、一種セラピー的な意味合いもあるようだ。最後に、学は離婚した元妻・麻紀の夢に侵入してゆく…。

これだけ現実離れた場面をリアルに描く作者の筆力には感心してしまう。とりわけ、夢と現実のあわい縫う文体には卓越したものがある。それだけに、最後がいささか物足りない。麻紀とのあいだにいったいなががあつたのか、その点に一步も二歩も踏み込む必要があるのではないか。

『白鴉』第31号掲載の、美月麻希「白い骨眠る谷底」は、他人でありながら擬似的な父と娘の関係にあるような、揺れ動く危うい関係を描いた、一〇五枚(目次による)の長篇。

冒頭は、三十二歳の純花が「センチ」の

もとに「とん汁」の材料をもって登場するところからはじまる。神社の境内の一角が「**ななき村**」と呼ばれる、ホームレスの過ごす場となっていて、いつしか純花は週に一度、そこに食事を届けるようになっていたのだった。その「**村**」には、六十代半ばですでに老婆のような印象の「ヨネ」、「うおお」としか声を発することができない「ヒロ」、大きな凶体の「クマ」がいる。

「**センセイ**」は元中学校の教頭で、はじめが原因で生徒が自殺し、そのことを苦に担任の女性教員が自殺未遂し、教頭として責任を問われたところで、逃亡して「**村**」に身を隠している。一方純花は、母を痛で亡くし、口うるさく厳格な父・亨と二人暮らしをしている。母の介護をしたことから自分には介護が向いていると思い、いまは老人施設でパートの仕事をしている。

ある夜、不意に純花が「**センセイ**」のもとへ車でやって来る。父親が亡くなったのだ。純花は、父の遺言にしたがって、遺体を山に捨てるのを手伝ってほしいと言っていた。そうすれば、年金をもらい続けることができると、というのが父の念願だった。「**センセイ**」はとまどいが、結局二人して亨を、純花の自宅の裏山の谷に遺棄する。その後、純花は「**センセイ**」に、父になりすまして一緒に暮らすことを持ちかける……

どこまでも優柔不断な「**センセイ**」と、自動的に見えてどんどん「**センセイ**」を巻き込んでゆく純花の怪しげな魅力が、不思議な作品世界を作りあげている。

『**白鴉**』同号掲載の、大新健一郎「**協力者**」は、琉球共和国として独立した沖縄と日本のあいだの「**離散家族**」をめぐる近未来小説で、こちらは七〇枚の中篇。

六年前に日本から琉球共和国に妻子とともに移住していた斎田和宏は、日本の母と姉のもとに一時帰国するため、「**離散家族**特別措置法」にのっとって、関西空港に降り立ったところ。二度の原発事故のために、斎田は家族の健康を考えて、かつて住んでいた神戸を離れたのである。帰国したのは、福知山にいまも暮らしている母と姉にも琉球国への移住を勧める目的があつてのことだが、説得は難しいと感じている。入国ゲートをくぐった途端、屈強な公安が和宏に張りつく。

一方、福知山の母と姉のもとへは、NHKのテレビ局が取材に入ることになっている。「**われら模範国民**」という番組があつて、斎田和宏の母と姉は、まさしくその「**模範国民**」と見なされているのである。福知山は原発事故が深刻な影響をあたえている地域であつて、そこで暮らすひとびとには「**帰還者支援資金**」などがあたえられているのだつた。

この作品の優れているのは、琉球共和国を

必ずしも一方的に「**善**」の位置においていないところ。タイトルの「**協力者**」と関わるが、じつは斎田和宏は日本に滞在した際、そのレポートを琉球共和国に提出することで報酬を得ている身である。琉球国と日本のリアル・ポリティクスにいつの間にか、斎田もまた巻き込まれているのだ。そのことを、いまは韓国に暮らしている友人・小倉孝之に問われる場面は、緊張感に満ちている。最後には、公安から日本国の「**協力者**」になること、いわばダブルスパイになることを斎田はもとめられる……

斎田の母と姉にくわえて、斎田自身にもマイクが向けられる、NHKの番組の生中継場面などと、じつに秀逸だった。

『**雑記噺子**』第24号掲載の、稲葉祥子「**あととり巨人旅行記**」は、いま紹介した大新健一郎「**協力者**」と同様の近未来小説。こちらは、二四三枚（目次による）で、今回読んだなかでいちばんの長篇。

いきなり、電柱をばこばこ引っこ抜いて、その電線であやとりしている「**巨人**」が登場する。いわば怪獣ゴジラのような巨人だが、それと気持ちを通わせることのできる「**ノユリ**」という女性との、ちよつと不思議な物語が展開してゆく。しかも、全篇「**ノユリ**の話」、「**警官の話**」、「**ノミの話**」という具合に括られていて、全体が一種の戯曲形式ともなつて

いる。

そもそも「巨人」がどういう存在なのか、謎めいているとしか言いようがないのだが、この作品において、「世界」はどうかやら東西南北の四つの国に分割されていて、とりわけ西の国は、原発事故によってきわめて深刻な事態に置かれているらしい。西の国の出身者はそれだけで周囲から忌避され差別されている状態である。

巨人は映画に出演したり、サーカス小屋で活躍したりして、最後には西の国にわたり、ガスを発し続けている山（聖山）にその身を横たえて蓋をすることによって、世界を救う。巨人はその山の大地とやがて一体となってゆく。巨人と一時的に恋人のような関係にもある「ノユリ」も「野の百合」であって、元来、自然の象徴であるのかもしれない。

作者の筆致は見事で、どの場面も読ませるしかし、全体としてどういう意図をもった作品なのか、私には不分明なところがあった。

ガリバー旅行記のパロディ、原子力発電などへの批判と、それはそれでよく分かるのだが、その先にあるものが見えてこないのだ。

『文宴』第132号掲載の、藤原伸久「アンダー・ザ・ヘブン」は、高校教員を主人公とした、爽やかな、一種遅れてきた青春小説の味わいがある。これも一一九枚超の長篇。

基本的に一人称小説なのだが、頑ななまで

に「私」とか「ぼく」とかの表記をいっさい排した書き方である。ともあれ、主人公はある日不意に味覚を喪失し、そこからどんどん破滅に陥ってゆく。高校の同級生でもあった妻との関係も悪化してゆくが、やはり同僚の体育教師で高校の同級生でもあった友人・田宮にトライアスロンの練習を勧められ、その運動をつうじて、なんとか回復の方向を得てゆく。主人公と妻、同僚の教員は、同じ高校の陸上部のメンバーだったという設定で、主人公は、その同僚と妻は高校時代に交際していたと思いついでいたのだが、それは勘違いで、じつは妻は主人公のほうに当時から好意を寄せていたことが判明する。最後、主人公はトライアスロンの競技で田宮を追い抜いてゴールするまでにいたる。

答えなどないだろう。しかし、作者はそういう問いに足を踏み入れているのである。

『パベル』第3号掲載の、秋尾菜里「季節」は、カウンセラーと「私」とのすれ違いの対話を軸にした、一一二枚超の物語。

「不眠」と「抑うつ状態」と診断された「私」は、生活保護を受けながら、部屋に閉じこもって暮らしている。三月月に一度やって来る生活保護の担当者、ある程度定期的に受診している精神科の医師、それが「私」の数少ない対話の相手だった。春、桜が散ったあと、「私」は「人と話したい」と思って、やめていたカウンセラーを再開する。しかし、新しい女性カウンセラーの問いに「私」はことごとく違和感をおぼえる。「私」は病院外の「カウンセリング講座」にも顔を出すようになる。そのなかで、以前のカウンセラーだった木戸（男性）との関係が甦ってくる。信頼していた木戸が断りもなく病院をやめたことに、「私」は捨てきれないわだかまりを感じていたのだ。最後にいたって、「私」は、木戸が自分になんとか連絡しようとしていたことを知る…。

全篇をつうじて、「私」の状態はけっして目に見えて良好になってゆくのではない。しかし、まさしくタイトルにある「季節」のめぐりのように、「私」が次第に外部の世界、とりわけ自分の心と向き合うようになってゆく様子うかがわれる。